

第五章「お母さん」

放課後、昇降口に向かう途中、中庭のベンチで寝ているメリーさんを発見した。がんばって起こし、駐輪場へと向かった。

再びメリーさんを荷台に乗せ、今朝とは別の軽い傾斜の道を降りていった。メリーさん、中山准が通っていた学校へ向かうためだ。事故現場と学校どっちを先に行くか迷ったが僕はこっちを選んだ。

T高校は進学校で、バスで僕の学校を降りずにさらに10分先に行った場所にある。

T高校へ向かう坂の途中、メリーさんが聞いてきた。

「どうして私の通う高校がわかったんですか？新聞にも詳しく書いてなかったのに」

「…あれ？なんでだろう」

そういえばそうだ、なんで僕は知っているんだろう？

しかもかなりの確信がある。

「制服が一緒だから…って会った時制服着てなかったよね？」

「はい、私服ですけど」

どこで彼女の制服姿を見たのだろうか。疑問は解けぬままT高校の校門の前についた。

「ここが、私の学校…」

ふらふらとメリーさんは校舎の中に入っていったが僕は校門に残った。やるべき仕事があるからだ。

下校のピークは過ぎたが、まだちらほら校門から出てくる生徒はいる。

紫が3年、赤が2年、青が1年の校章バッチで判断をする。

狙うは赤、それも女子。片っ端からメリーさん、中山准の事を聞く。

そう思って校門の前をうろろしていた。

たまにでてくる女子の胸の校章を見てはタメ息をつく。6人連続で青の校章が続く。

次こそは、と思っていると後ろから肩を叩かれた。

振り向くとそこにはいかにもガチムチといった首から笛を下げた体育教師であろう男が立っていた。

「校門に立って女子生徒の胸を見ているというのはおまえか？ちよつと来てもらおうか。」

僕は、心の中で人生オワタと思った。

僕は職員室であろう場所に連れてこられた。他の先生はいない、野球部の声だけが聞こえる。

扉を閉めようとしたらメリーさんが、扉を突き抜けてきた。

「ど、どうしたんですかっ!？」

僕は声出すわけには行かないので口パクで大丈夫とだけ言った。

そこに座れと促されたので素直にそこに座る。

「ふう、女子生徒から苦情が来てな、校門の前に変態がいるとの事だ。胸を見ていたんだな？」

「そ、そうなんですか!？」

「違う!」

メリーさんまで僕を疑うのか。味方もない四面楚歌。

「じゃあ、なんでだ」

下手に隠すよりそのまま話した方がいいと判断した僕は経緯と中山准の住所を知りたい事を話した。

体育教師はふうくと長いため息をついた。

「…おまえと中山の関係は？」

「ずっと前から好きだったんです!」

間髪入れずにそう答えた。

後ろでメリーさんがいろいろ言ってるがこの際無視する事にする。

体育教師が頭を搔いてから言った。

「俺はなあ、中山の担任だと言うか担任だった。住所を教えてやる、線香でもあげさせてもらえ
そう言うとか机から生徒名簿を取り出し、小さなメモ用紙に住所を書き移してくれた。

メモを見て驚いたのは意外と字が丸っこくて可愛い事と、さらに驚いた事が僕の家と近くだった。
体育教師にお礼を告げ誰もいなくなった校門へと向かう。

その際メリーさんの顔が赤く様子がどこかおかしかったが特に気にしなかった。

これで住所がわかった。

辺りは暗くなりはじめた頃だったが自転車なら間にあう気がする。

メリーさんに自転車の後ろに乗るように促して自転車を漕ぐ。メリーさんは黙ったままだった。

僕は彼女の家に行っていていいのかと迷った。

もしかしたらつらい思いをするかもしれない。

「メリーさん：君の家行って見る？」

「：行きます」

それ以外僕もメリーさんも何も言わなかった。

星が見え始めた夜空を眺めながら僕は自転車を漕ぎ続ける。

30分ほど自転車を漕ぎ続けると辺りはすっかり真っ暗だった。

自転車の明かりを頼りに進み続ける。

いつのまにかメリーさんの手が僕の制服の掴んでいたが僕は無言で走り続けた。

やがて僕の家が見えてきた。

明かりがついているので親が帰って来ているのだろう。だが、僕は自分の家の前をスルーした。

メリーさんの家は僕の家のすこし先。5分と言ったところだろうか。

民家が立ち並んでいる場所で自転車を降りた。

メリーさんと共に中山の表札を探す。

お世辞にも大きいとは言えないがアットホームな家の玄関に掲げられた中山の文字。

「ここだ…」

メリーさんはずっと僕の背中の裾を掴んでいる。

押すよと、一言いい、僕は呼び鈴のボタンを押した。

インターフォンが無く呼び鈴だけのシンプルな物だったので僕とメリーさんはドアが開くのを待った。

やがてガチャリとドアが開く。鍵は掛けていなかったらしい。

地方の片田舎の家じゃめずらしくもない、中から出てきたのは中年のおばさんだった。

おばさんというわりには若々しく美人だと思ったがすこしやつれているようにも見える。

「どちらさまで？」

声が少し枯れているようにも思える。

「准さんの友達です…。すみませんがお線香をあげさせてもらえないでしょうか」

「准の…ありがとうございます、さあ上がって」

僕は中へと案内され、今の片隅に作られた真新しい仏壇の前に座った。

メリーさんは何も言わず付いて来たが裾を掴む力が強くなっていた。

遺影にはメリーさんではなく中山准が笑っていた。

僕は線香を3本取り火をつけ香炉に立てて手を合わせた。

後ろからおばさんのすすり泣く声が聞こえた。

振り向くとメリーさんがおばさんをずっと見ている。

「おかあ…さん」

メリーさんが消え入りそうな声でそう言った。

「おかあさん！」

と、おばさんに飛びついたが触れる事はできず宙をかくように手を交差させる。

僕はその光景をただ見ている事しかできない。

心が痛む光景だった。唯一できそうな事は泣いているメリーさんの頭を撫でてやることだ。

おばさんから見たら空中で手を動かしているようにしか見えないんだろうが、気にせず撫でてあげる。

しばらくの間2人は泣き続けた。

「今日はここに泊まります」

泣き止んだメリーさんはそう言って続けた。

せつかく少し記憶も戻りましたしおかあさんと一緒に居たいですし、と。

僕はわかったと一言言って中山家を後にする。

今晚だけはメリーでは無く中山准として過ごせばいいな、と満天の星空を眺めながらそう思った。

さて、帰ろうか母親の待つ家へ。